

# バードリサーチ ニュース

2007年4月号 Vol.4 No.4



Hirundo rustica  
Photo by Uchida Hiroshi

## 参加型調査

### ベランダバードウォッチ 2006冬期 ～ 昨冬との最大の違いはツグミ ～ 平野 敏明・植田 睦之

ベランダバードウォッチの冬期の調査は、この冬で2回目を迎えました。家での調査と家のまわりの調査に合計51人の方に参加いただきました。調査地も北海道から九州まで広く分布していましたが、やはり関東地方の方にたくさん調査をしていただきました(図1)。

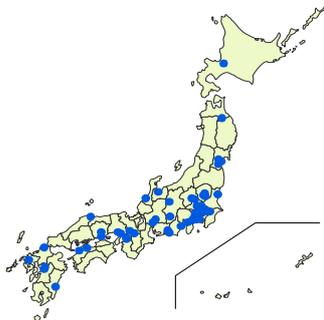


図1. ベランダ調査地の分布。

#### 1. ジョウビタキとツグミは何が違ったのか?

今回の調査結果でおもしろかったのはジョウビタキとツグミの記録状況の昨年との違いです。

ジョウビタキは、昨年と記録パターンはほぼ同じで、10月下旬から記録される調査地が増え、その後、年内は安定して多く記録され、年を越えると記録されることが減ってきました。じっくり観察していると見つけることができますので、年を越えるといなくなってしまうわけ



ツグミ。[Photo by 長嶋宏之]



ジョウビタキ。  
[Photo by 門脇進]

ではなく、鳴かなくなって目立たなくなるのだと思います。それに対してツグミは2005年と2006年の冬で大きく異なりました。昨年は、11月下旬から記録率が増加しましたが、今年は一月初旬から高くなり、その後も記録率は上昇し続けたのです(図2)。



図2. ジョウビタキとツグミの出現率の季節変化の2年間の比較。

両種に違いがみられたのは、越冬生態の違いを反映しているのかもしれませんが。クマの出没騒ぎで言われたように、この秋は山に木の実が少なく、ツグミはいち早く平地へ降りてきたため今年は記録される時期が早く、多くのツグミが見られたのかもしれませんが。一方、ジョウビタキは冬もなわばりをかまえるので、途中で山に立ち寄りせず繁殖地から一直線に越冬地に戻ってくるので、昨年と今年で差がなかったのかもしれませんが。年による出現時期の違いは、季節前線ウォッチと同じようにベランダバードウォッチを続けていくことで得られる結果の一つです。さらに何年も続けることで、気象などとの関係を解析できると思います。

#### 2. ベランダでも記録種に年変動?

もう一つは家での調査で記録された種の前回の重複率です。昨年と同じ場所で4回以上行なっていただいた13地点の結果をみると、両シーズンともまったく同じ種が記録された(重複率100%)調査地は1か所のみで、多くの調査地は60%台だったのです(図3)。

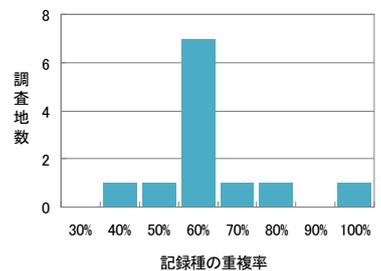


図3. 昨冬と今冬の調査での出現種の重複率のヒストグラム。

家で見られる鳥は種数も限られ毎年同じような鳥だろうと思っていたので、このように重複率が低かったのは意外な結果でした。たまたまこの2年間に鳥の飛来状況の差が大きかったのか、それとも冬期はそもそも変動が大きいのか興味深い問題です。これからも調査を継続していき、この問題を明らかにしたいと思います。

#### 3. まもなく繁殖期の調査が始まります!

まもなくベランダバードウォッチの繁殖期の調査もはじまります。ご参加よろしくお願ひいたします。また、今まで調査に参加されていない方も、WEBサービスの「身近な野鳥調査」から簡単に調査地を登録して、調査をはじめることができます。興味を持っていただけた方は、ぜひ調査地を登録して、参加していただきますようお願いいたします。

調査結果の詳細は、下記のサイトでご覧いただけます。

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/veranda/index\\_kekka.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/veranda/index_kekka.html)

## 活動報告

### ミヤマガラスの渡り ～レーダーでその姿を追いかける～

植田 睦之・高木 憲太郎

昨年の3月にミヤマガラスの越冬地の視察をしていたところ、出雲平野で500羽ぐらいの群れが次から次へと北に向って飛んでいくのを目の当たりにして感動しました。この群れがどこをどう渡っていくのか見てみたいと思い、この3月に船舶レーダーを使ったミヤマガラスの群れの追跡調査を試みました(文部科学省科学技術総合総合研究委託)。

#### 1. 出雲から西北西に一直線

3月7日より9日までの日程で調査に行ったものの、あいにく天気が悪く、なかなか渡りを見ることができませんでした。それでも、最終日にはどうにか天気が回復し、渡りに絶好の追い風が吹きはじめました。今か今かと待ちわびていたところ、ミヤマガラスの鳴き声が耳に聞こえ、見上げてみるとミヤマガラスの群れが上空を飛んでいました。

レーダーで追跡できた群れは2つ、いずれも西北西の方向へ一直線に渡っていきました。1群は12km沖まで、もう1群は17kmまで追跡することができました。速度は時速約40km、朝鮮半島まで7時間ちょっとで渡ることができる計算になります。

地図を見ると、出雲付近から海岸線は南西の方向に向かっていきます。

そのため九州を経由して渡ると海の上を飛ぶ距離は短くできますが、かなり大まわりになってしまい渡る距離は長くなってしまいます。おそらくそのため、出雲付近から海に出て直接朝鮮半島に渡るのだと思います。昨年衛星追跡で渡りを調査した八郎潟のミヤマガラスも大陸との距離が最も近い渡島半島から日本海を西に向って横切るコースで渡っていたので(平岡ほか 2006)、不思議なことに、海を渡る危険を避けつつも最も効率よく渡ることのできる経路がガラスにはわかっているようです。

レーダーを使った次の調査は、渡り鳥の飛行高度と気流の関係について調べてみる予定です。成果が得られましたらまたご報告しますので、期待しててください。



図1. レーダーに映ったミヤマガラスの群れ。白い矢印の下をその方向に向って移動している。



図2. 調査地とミヤマガラスの飛行方向。

#### 2. 引用文献

平岡恵美子ほか. 2006. マガモ, オナガガモおよびミヤマガラスの渡り衛星追跡. 日本鳥学会2006年度大会講演要旨集.

### 温度ロガーを使って鳥の繁殖時期を探る ～試験的調査を開始しました～

植田 睦之

今年の冬はおかしな冬でした。東京の初雪はなんと3月16日、史上最も遅い記録とのこと。そして数日後の20日には桜が開花しました。このような気候の変化により鳥の繁殖時期が変化していることが知られています。

#### 1. 変化する鳥の繁殖時期

新潟でコムクドリ(コムクドリ)の繁殖生態を研究している小池重人さんたちの調査から、コムクドリの繁殖開始時期が早くなっていることが明らかにされています(Koike & Higuchi 2002)。ヨーロッパでも同様の現象が起きており、温暖化が原因ではないかと考えられています。反面、繁殖時期に変化がみられない鳥もいます。マダラヒタキの場合、食物になるイモムシの発生時期は早まっているのに、繁殖時期は変わっていません。そのため餌不足になり、個体数が減少しているのではないかとされています(Both *et al.* 2006)。

日本ではコムクドリでは繁殖時期の変化について明らかにされていますが、そのほかの種でどうなっているのかはまったく情報がありません。マダラヒタキのように気づいたときには減っているということにもなりかねません。

#### 2. 温度ロガーで抱卵開始時期を捉える!

そこで、鳥の繁殖開始時期を調べようと思い、今年から試行をはじめました。それは温度ロガーを使った鳥の繁殖開始時期の調査です。東京大学の石田健さんと話をしているときにアイデアなのですが、巣箱の底に温度ロガーを設置して、その温度変化を見れば、抱卵が始まった時期を検出できるのではないかとこのものです。これが可能なら、繁殖前にロガー付きの巣箱を設置し終了後に回収することで、それほど手間をかけずに繁殖時期や、失敗時期などについてもわかるかもしれません。もちろん巣材を厚く敷く鳥ではうまく検出できないかもしれないなど本当にできるかどうかは、やってみなければわかりません。そこで、森林総研の関伸一さん、新潟の小池重人さん、我孫子市鳥の博物館の時田賢一さんと一緒に、今年から実験を始めることにしました。うまくいったら全国展開をしたいと思っていますので、そのときはご協力よろしくお願いたします。

なお、時田さんをお願いしているフクロウの巣箱のロガーでは、産卵が確認されれば巣箱内の様子をインターネット配信も検討しています(<http://www.bird-mus.abiko.chiba.jp/>)。ぜひご注目ください!【植田睦之】

#### 3. 引用・参考文献

Both, C., Bouwhuis, S., Lessells, C.M. & Visser, M.E. 2006. Climate change and population declines in a long-distance migratory bird. *Nature* 441: 81-82.  
Koike, S. & Higuchi, H. 2002. Long-term trends in the egg-laying date and clutch size of Red-cheeked Starlings *Sturnia philippensis*. *Ibis* 144: 150-152.

## 参加型調査

### フィールドノート 簡単化計画第2弾 ～Excelデータ変換機能搭載！～ 神山 和夫 バードリサーチ嘱託研究員

「フィールドノートで観察記録を整理したいけど、過去のデータを手で入力するのは大変」あるいは「フィールドノートのWeb画面よりもExcelのほうが早く入力できるのに」と思っていた皆さま、お待たせいたしました。1月号でご紹介したマークシート入力に続くフィールドノート簡単化計画の第2弾は、ご要望が多かったExcelデータの変換です。

表のようにクロス集計の形になっているExcelファイルから、フィールドノートにデータを変換することができます。

変換作業は事務局が行いますので、変換をご希望の方は下表の形に成型したExcelファイルをメールで神山(koyama@bird-research.jp)宛にお送りください。

表. フィールドノートに変換できるExcelの形式.

調査地名	ひょうたん池	ひょうたん池	ひょうたん池
観察者名	神山、植田、加藤	植田、高木	神山ほか
調査年月日	2007/3/15	2007/3/30	2007/4/5
調査開始時間	7:00	6:30	6:30
調査終了時間	8:15	7:30	7:30
天候	晴れ	晴れ	曇り
観察概要			探鳥会で20名参加
カイツブリ			
カウ		5	
アオサギ			●
コサギ	1	1	
マガモ	1		●
カルガモ	4	7	●
ハクセキレイ	1	1	●
ヒヨドリ	15	5	●
モズ	1		●
ジョウビタキ	1		

### ● Excelファイル作成時の注意！

黄色の項目は必須項目です。時間や天候などはなくてもかまいません。調査地名はあらかじめフィールドノートの「調査地の登録」で登録しておく必要があります。日付は「/」、時間は「:」で区切って下さい。観察概要は300字まで記入できます。種名の順番は自由です。変換できるのは数字だけで、「オス3羽」などは変換できません。個体数を数えていない場合は●を記入して下さい。

## 研究誌 Bird Research よい

渡辺さんと鈴木さんによるコハクチョウの特殊な採食法についての観察記録がBird Researchに掲載されました。

渡辺朝一・鈴木 康. 2007. 越後平野で観察されたコハクチョウの掘り進み採食. Bird Research 3: S1-S5

コハクチョウは通常落ち糞を濾しとったり、草本をちぎったりして採食するのですが、まれに嘴で地面を掘りかえして採食することがあります。渡辺さんたちは、この採食がどの時期に行なわれるのか、そして何を食べているのかについて調べました。この採食方法をしていた時の糞を採取して解析したところ、クログワイを食べていることが明らかになりました。

### 飛翔性昆虫ウォッチ ～今年の繁殖期から本格始動！～ 植田 睦之

この繁殖期から飛翔性昆虫ウォッチの全国調査をはじめたいと思います。ぜひご参加ください！

#### 1. 飛翔性昆虫ウォッチとは？

飛翔性昆虫ウォッチは、最近の鳥類の減少に食物である飛翔性昆虫の減少が影響しているのではないかと考え、はじめることにした調査です。方法は、夜に自動販売機を周り、そこにいる虫の数をかぞえるという簡単な調査です。

一昨年と昨年の予備調査で、バードリサーチの事務所の周辺で重点調査を行なったところ、飛翔性昆虫の数には地域差や季節変化があることがわかりました(図)。また、三田長久さん、白石健一さん、松尾淳一さんにご協力いただき、熊本と大阪でも調査を行なったところ、似た結果が得られました。この結果から、この調査の全国展開の有効性を確認することができました。

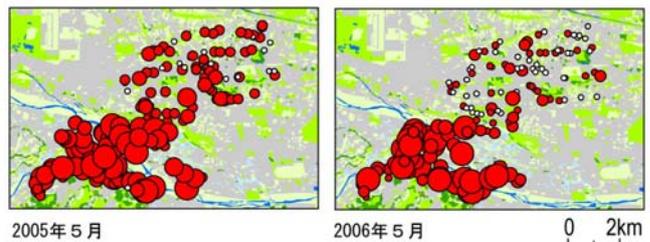


図. 2005年と2006年の5月の事務所周辺の自販機の虫の量の比較.

#### 2. ぜひ、ご参加ください！

調査は5月と8月を必須月とし、可能な方には6月と7月にも調査していただきたいと思っています。調査の詳細は飛翔性昆虫ウォッチのページ([http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/index\\_hisho.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_hisho.html))をご覧ください。鳥ではない虫の調査も、やってみると今まで気づかなかったことが見えてきて面白いものです。ぜひご参加ください。

た。またこの採食方法は2月下旬以降に行なわれることがわかりました。落ち糞などを食べつくして食物が不足するとこの採食方法を行なうのかもしれないし、あるいは、この特殊な採食法をとる群れがこの時期になると春の渡りで北上して来る可能性があるため、渡辺さんたちは考えています。



写真. 掘り進み採食するコハクチョウ.

【植田睦之】

# ルリビタキ 英:Red-flanked Bushrobin 学:Tarsiger cyanurus

## 1. 分類と形態

分類: スズメ目 ツグミ科

全長: 約14cm  
 翼長: ♂ 75.5-84.0mm ♀ 72.0-79.0mm  
 尾長: ♂ 55.0-63.0mm ♀ 51.5-58.5mm  
 嘴峰長: ♂ 10.0-11.5mm ♀ 10.0-11.5mm  
 ふ蹠長: ♂ 21.1-24.0mm ♀ 21.0-24.1mm  
 体重: ♂ 11.0-15.2g ♀ 10.0-17.8g

※山階(1941), Cramp(1988) による.

### 羽色:

メスは背面と翼がオリーブ褐色、腰と上尾筒、尾が光沢を帯びた青色。下面は薄いクリーム色。嘴と脚は黒い。脇羽は鮮やかなオレンジ色で、薄いクリーム色～白色の眉斑を持つ。

オスは1齢時(第一回夏羽)まで外見はメスと極似しているが、小翼羽が青味がかかる傾向がある。

1齢以上のオス(第二回冬羽以降)は、頭部から尾に至るまでの上面が青色、特に腰と上尾筒、尾羽は光沢を帯びた青色となる。翼は青く、小翼羽は金属光沢を帯びる傾向がある。下面は白色であり、白い眉斑を持つ。脇羽は明るい橙色。嘴と脚は黒い。幼羽は雌雄ともに、上面はクリーム色斑のある茶褐色の羽衣に覆われる。尾羽は青い。



写真1. ルリビタキのオスの成鳥。  
[Photo by 日比野敏行]



写真2.  
ルリビタキのメス(左)と、1歳(第一回夏羽)のオス(右)。

### 鳴き声:

繁殖期のオスは、早朝より夕方まで1日中さえぎり、天候が崩れても比較的よく鳴く。樹冠部でさえぎることが多く、澄んだ笛のような声で「ヒュロロ ピュロロロチュロリッ」という短めのフレーズを繰り返しさえぎる。地鳴きは雌雄ともに「ヒッ、ヒッ」、「カッ、カッ」と少し濁った声で鳴く。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

ルリビタキには2亜種があり、*T.c.rufilatus* はヒマラヤ地区と中国西部に分布する。短距離の移動を行い、越冬期には南下し、インド、ミャンマー、タイ北部に至るとされている。一方、*T.c.cyanurus* は日本、中国、モンゴル、ロシア等で繁殖し、この中でも北方の個体群は越冬期は南下、拡散する。東ヨーロッパとロシアの境界(フィンランド等)まで移動することは稀だが、少数の観察例がある(Cramp1988)。

日本では全国的に生息している。本州においては漂鳥であるが、北海道や東北地方などでは夏鳥である。越冬期には本州中部以南の低地にて普通に見られ、四国、九州、伊豆諸島、小笠原諸島、奄美大島、台湾などでも越冬する(日本鳥学会 2000)。

### 生息環境:

本州では標高約1,500m以上の亜高山～高山帯の森林で繁殖する。北海道を含む国内高緯度地域では、植相の垂直分布に伴い繁殖標高は低下する。繁殖環境は森林限界域の針葉樹低木林から亜高山域の針広混交林まで幅広い。越冬期は低地の低木や藪があるやや開けた環境で越冬する。

## 3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

非繁殖期 繁殖期 (本州の場合)

### 繁殖システム:

一夫一妻制。オスが単独で盛んにさえぎりながらなわばりを形成した後、メスとつがう。本種では造巢、抱卵はメスのみが行う。育雛における抱雛はメスのみが行うが、給餌は雌雄で分担して行われる。育雛時の給餌の分担はヒナの成長段階によって変化するが、ほぼ半々である。

### 巢:

地上営巢。土のくぼみや木の根と地面との隙間、岩のくぼみなどで営巢する。シラビソの葉などを土台にし、その上にコケや獣毛等を用いて、お椀型の巢を造る。大きさは約15cm×15cm。造巢はメスのみが行う(緑川1970, Cramp 1988)。



写真3. 地面の小さな穴の中に作られたジュウイチにより托卵されたルリビタキの巢。ルリビタキの白っぽい卵の中にジュウイチの青い卵が見える。

### 卵:

造巢終了後、1日1卵を朝方に産卵する。卵は白色だが、鈍端付近に淡い茶色の細い斑が少数散在する。一腹卵数は3～6卵。約18mm×14mm。卵重量は1.6～2.3g。

### 抱卵・育雛期間, 営巢回数, 捕食, 托卵:

抱卵は約15日間、巢内育雛は約15日間行われる(緑川1970)。可能な場合は複数回繁殖を行い、1繁殖期における繁殖回数はつがいあたり1～2回である。ツツドリとジュウイチに托卵を受ける(緑川1970)。卵やヒナが捕食される事が多い。捕食と托卵による影響が大きく、巢立ち率は約50%を下回る。



写真4. 巢立ち直後のヒナ。

### 越冬生態:

各個体が単独なわばりを形成し、越冬する(Cramp 1988)。

渡り:

本州では繁殖地である亜高山帯から、越冬地である低地へと移動する漂鳥とされる。その移動距離を示すデータは少なく、バンディングによる長距離移動と短距離移動のデータが数例あるのみである。この中には、北海道で捕獲された個体が九州や本州中部で捕獲された長距離移動の例も含まれる(山階 1997)。北海道などでは夏鳥であるため、北海道を通過する個体群は比較的長距離を移動すると考えられている。

4. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 独特の色彩発現様式

1歳オス(写真2右)は未成熟個体ではなく性的には成熟しており、青色のオス(2歳以上のオス, 写真1)と同様の繁殖を行う。このようにルリビタキのオスでは、最終的な羽色(青色)の発現のみが大きく遅れる。このような羽色の発現の仕方は他の多くの鳥では見られない特徴であり、世界的にも多くない。この独特の羽色発現の遅延現象は、Delayed Plumage Maturation (DPM)という名前がつけられており、日本語では遅延羽色成熟と呼ばれる(日本鳥学会用語委員会 2006)。

● 雄間闘争における視覚信号

ルリビタキのオスの外見の違いは雄間闘争に関係があることがわかっている(Morimoto *et al.* 2006)。繁殖地に到着したルリビタキのオスはそれぞれが盛んにさえずり、なわばりを確立する。この際、隣接するオスとの間で闘争が起こる。闘争行動は、オレンジ色の脇羽を大きく膨らませながら「ヒッ、ヒッ」と声を発する威嚇行動(中村 1995)から始まる。その後、雄間闘争はお互いを追い回す追いかけ行動、さらに相手につかみかかったりつき合いといった身体的接触を伴う直接闘争へと発展する(Morimoto *et al.* 2006)。オス同士が争う際、この雄間闘争の激しさが、戦うオスの色の組み合わせによって異なることがわかった(Morimoto *et al.* 2006)。同色同士が争うと、争いが直接闘争まで発展するケースが多い(図1(a),(c))が、異なる色同士が争う際には、直接闘争に至ることは稀であり、追いかけ行動まで済むことが多い(図1(b))。このことからオス同士は相手の羽色に応じて、闘争を避けて、そのリスクを減らそうとしている可能性がある。オスの年齢と連動した外見の違いは、オスの社会的地位を表す信号として機能しているのかもしれない。

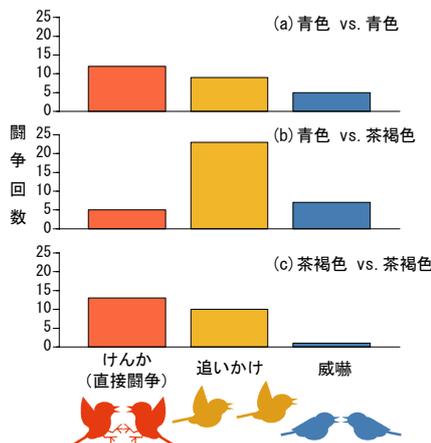


図1. 雄の羽色と闘争回数との関係。

● メスによる選り好みと羽色の関係

鳥類の多くの種で、派手なオスの方がメスに選ばれやすいことが知られている。しかしながら、ルリビタキにおける著者の研究では、2年間におけるメスの獲得率は色が異なるオス間で差はなかった。ルリビタキの大きく異なる雄間の外見が、本当にメスによる選り好みに関わりがないのか、それとも実は何らかの隠れたメカニズムがあるのかは今後の詳細な研究が必要である。

5. 引用・参考文献

Cramp(ed). 1988. *Tarsiger cyanurus* Red-flanked Bluetail. The Birds of the Western Palearctic. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa, Volume V, 664-671. Oxford University Press, Oxford.

緑川忠一. 1970. 上水内郡誌編纂会(編). 長野県・上水内郡誌自然編, 785-792. 長野県上水内郡市役所, 長野.

Morimoto, G., Yamaguchi, N. & Ueda, K. 2006. Plumage color as a status signal in male-male interaction in the red-flanked bushrobin, *Tarsiger cyanurus*. J. Ethol. 24: 261-266.

中村登流. 1995. 中村登流・中村雅彦(編). 日本野鳥生態図鑑 陸鳥編, 177. 保育社, 大阪.

日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版, 204-205. 日本鳥学会, 北海道.

日本鳥学会用語委員会(編). 2006. 鳥学用語集, 42. 日本鳥学会, 東京.

Rohwer, S. 1975. The Social Significance of Avian Winter Plumage Variability. Evolution 29: 593-610.

山階 芳麿. 1941. 日本の鳥類と其生態 第二巻, 301-308. 岩波書店, 東京.

山階鳥類研究所. 1997. 渡り鳥アトラス鳥類回収記録解析報告書スズメ目編1961~1955年, 51. 山階鳥類研究所, 千葉.

執筆者

森本元 東邦大学理学部生態系研究センター 訪問研究員

ハクセキレイの越冬個体群を対象とした研究を行ったのち、ルリビタキの研究を始め既に8年目となりました。繁殖生態に関わる行動生態学的研究への興味とルリビタキのオスの二色性の不思議さに惹かれて始めたルリビタキの研究ですが、いざやってみると、一筋縄ではいかない手ごわい相手です。暖めている複数のテーマがあるので、しつこくルリビタキにこだわって、春から秋への季節のうつろいを感じながら調査地である亜高山暮らしを、今後も楽しみたいと思っています。



## レポート

## カワウの狩猟鳥化について ～ 意見の送付は20日まで！～ 加藤 ななえ・高木 憲太郎

### 1. 狩猟鳥獣種の見直し等検討調査第1回検討会

狩猟鳥獣種の見直しについて、3月18日に虎ノ門で検討会が開催されたので傍聴してきました。この検討会は狩猟鳥獣を見直す手法に関する指針をまとめるためのものですが、今回の議論の中心は、ウズラの捕獲等の禁止、カワウの狩猟鳥獣への追加、メスジカの捕獲等の禁止の解除についてでした。

この中で委員から最も多く意見が出されたのはカワウについてでした。「ほんとうにハンターがカワウを撃つのか？」という意見もあれば、逆に「他の狩猟対象鳥獣では非繁殖期として設定されている狩猟期間が、カワウの場合繁殖期と重なっている。コロニーで狩猟が無差別に行なわれると個体群に大きな影響を与えるのではないか?」、「狩猟鳥化してしまうと特定計画を策定する都道府県の意欲がなくなってしまうのではないか?」などの意見が出されていました。特にどの委員も共通して指摘していたのは、「狩猟鳥化によって科学的・計画的な管理ができなくなるのではないか」ということでした。

### ● 意見をお持ちの方は、環境省に

狩猟鳥獣種の見直し(鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律施行規則の一部改正)について、環境省のホームページに意見の募集がされています。この意見募集は4月20日で締め切られます。意見をお持ちの方は、下記のホームページから、意見募集要項を確認してお送りください。



<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8179>

### 2. バードリサーチの考え

#### ● 狩猟が行われた場合の問題点

食用に向かないカワウを積極的に捕獲しようとする狩猟者がどれほどいるかはわかりません。しかし、狩猟が積極

的に行われた場合、可猟区へのカワウの飛来が減少する分、狩猟禁止区域に飛来が集中することが予想されます。その場合、狩猟禁止区域にある漁場や養殖場での被害が拡大します。管理上は被害が起きては困る地域で重点的に対策を施し、被害の発生し難い地域に追い払うべきですが、そうした管理が上手くできなくなる可能性が考えられます。特に、ねぐらやコロニーで無計画に狩猟が行なわれると、カワウの分布が大きく変わり管理に影響するほか、分散することによって対策や調査にかかる労力が増えることも考えられます。



#### ● 計画的・科学的な保護管理の推進と矛盾する点

関東や中部近畿では広域協議会が立ちあがり、都道府県でも特定計画などを策定して、計画的・科学的にカワウの保護管理を進めていこうという体制ができつつあります。カワウの捕獲は有害鳥獣捕獲でこれまでも行なわれており、捕獲データもそのほかのデータと同様に広域協議会で集約され、科学委員会などでの検証の上、協議会の合意を得てさらにその先の計画作りをするためのルールができつつあります。

しかし、狩猟鳥化されると、捕獲場所や捕獲数の管理ができなくなる可能性が高く、そうなれば、これまで進めてきた計画的・科学的な保護管理と矛盾してしまいます。さらに、狩猟では場所と狩猟数以外の報告義務がないため、科学的な検証に使える情報が減ってしまいます。

#### ● バードリサーチの考え

以上のことからバードリサーチでは、カワウを狩猟鳥獣に追加するべきではないと考えます。しかし、カワウが追加される場合は、個体群の維持や計画的な管理に支障をきたす可能性のあるコロニーでは狩猟の禁止措置が取れるようにすることや、狩猟に関するデータが有害鳥獣捕獲のデータと同等の質をもって広域協議会に集まる仕組みの構築、狩猟鳥化の影響をモニタリングするための継続的な調査の実施を要望しようと思います。また、数年後に再検討することが明文化されるように要望しようと思います。

バードリサーチニュース 2007年4月号 Vol.4 No.4

2007年 4月 13日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 II-202

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎